

一、次の文章を読み、後の (1) ～ (3) の問いに答えなさい。 【H 16】

「ある人が、梅雨の晴れ間のある夜、川の土手に沿った道を歩いていた。月は薄い雲につつまれ、草におりている露は宝石のように輝いていた。」

芦もまばらにかる沢の、あやめも分ぬところに、堤を沿ふて白犬あり。礫をもつて追へばひたもの逃ぐ。静かにゆけば犬も静かに、とどまれば犬もとどまれり。かくて追ふと思ひつつ、十四五町ゆくに、一声ほゆる事もなし。それより江の堤には沿はず、我ゆくみちは横なりしに、犬見えざる。こはいかにと又もとのかたへもどりて見れば犬あり。①ふしぎのおもひをなすに、何の別の事もなし。濁水にくもりし月の影うつろひしなり。犬と思ひしときは月と見えす。月とがてんして、なほど犬に見なさんとせしかども、犬とはかつて見えざるなり。②一念の赴くところいなものにて、十四五町③まよへり。しりて後は、④まよふて見んと思ひしかども、まよはれずとかたれり。

『御伽物語』による)

(注) 芦もまばらにかる沢：芦をまばらに刈り取った水辺。

あやめも分ぬ：者の区別もつかないこと。

礫：小石 ひたもの：ひたすら かくて：このように

十四五町：およそ千五百メートル。 江：川

いかに：どうしたことか。 別の事：特別なこと。

(1) 文章中の ― 線部①に「ふしぎのおもひ」とあるが、文章中の「ある人」が不思議なことと思うようになった直接のきっかけはどのようなことであつたか。その説明として適切なものを、次のア～エから一つ選び、その記号を書け。

ア、どんなに追い払っても、逃げることもなく

犬がつきまとつてくること

イ、横道にそれると犬は見えなくなるが、

もとのところにもどると犬が見えること

ウ、静かに歩いていくと犬も静かに歩き、

立ち止まると犬も立ち止まること

エ、物の区別もつかないところに、白い犬が

いるのが見えること

(2) 文章中の ― 線部②の「一念の赴くところ」は、すっかり犬と思いこんでいたといくことである。文章中の「ある人」は、何を犬と思いこんでいたのか、適切なものを次のア～エから一つ選び、その記号を書け。

ア、流れる水が立てる白い波

イ、月を包んでいる薄い雲

ウ、まばらに刈られた芦の影

エ、濁った水に映った月の光

(3) 文章中の ― 線部③の「まよへり」を現代仮名遣いに直して、 ― 線部全部をひらがなで書け。

(4) 文章中の ― 線部④に「まよふて見んと思ひしかども、まよはれず」とあるが、このことを具体的に述べている一文を文章の中から探し、その初めの三字を書け。

一、次の文章を読み、後の (1) ～ (3) の問いに答えなさい。 【H 17】

①今は昔、比叡の山の西塔に実因僧都といふ人ありけり。小松の僧都とぞ言ひける。顕密の道につきてやむごとかりける人なり。それに、いみじく力ある人にてありける。僧都、昼寝したりけるに、若き弟子ども、師の力ある由を聞きて試みむがために、胡桃を取りて持て来たりて、僧都の足の指十が中に胡桃八つを。はさみたりければ、僧都は虚寝をしたりければ、うち任せてはさまれて後、寝伸びを②するやうにうちうむめて足を。はさみければ、③八つの胡桃一度にはらはらと碎けにけり。

『今昔物語集』による)

(注) 比の叡山：比叡山延暦寺をさす。

西塔：比叡山三塔の一つ。

実因僧都：比叡山の僧で、小松の僧都とも称す。

顕密：仏教における教えの種類で、顕教と密教のこと。

やむごととなりける：極めて立派な。

虚寝：寝たふりをする。

うむめて：うめいて。

(1) 文章中の ― 線部①の「今は昔」の意味として適切なものを、次のア～エから一つ選び、その記号を書け。

ア、今と昔を比べてみると

イ、今も昔のままであるが

ウ、今となつては昔のことだが

エ、今を昔と考えるならば

(2) 文章中の ― 線部 a の「はさみたりければ」と b の「はさみければ」の行為を行つた者は、それぞれ誰か。その組み合わせとして適切なものを、次のア～エから一つ選び、その記号を書け。

ア、 a ― 弟子ども b ― 弟子ども

イ、 a ― 弟子ども b ― 実因僧都

ウ、 a ― 実因僧都 b ― 弟子ども

エ、 a ― 実因僧都 b ― 実因僧都

(3) 文章中の ― 線部②の「するやうに」を現代仮名遣いに直して、 ― 線部全部をひらがなで書け。

(4) 文章中の ― 線部③に「八つの胡桃一度にはらはらと碎けにけり」とあるが、このことから実因僧都についてどのようなことが確かめられたか。― こと」の形になるように、― 内に当てはまる言葉を、文章中から七字でそのまま抜き出して書け。

こと

一、次の文章を読み、後の(1)～(3)の問いに答えなさい。 【H18】

ある在郷のやせ寺に、山崎の開帳うらやましく①思はれけれど、霊宝なければ、すべきやうなく、②知恵を出して開帳の札に云く、

一 当寺代々相伝はる貧乏神、御夢想によつて、来る七月十四日より開帳せしむるものなり。もし参詣なき方へは、貧乏神御入りあるべきとの御託宣なり。早々参詣あるべく候。以上

未五月四日

と書きて、「さあつかみどりじや」と、地下中うち寄り賑ふ所に、ふしぎや、かの神あらはれ給ひ、さやうに、われを人目にさらし、銭かね取り込み繁昌せば、この寺には住みがたし。名残り惜しやと、夕暮れにかき消すごとく失せ給ふ。 『元禄期輕口本集』による)

(注) 在郷のやせ寺：田舎の貧乏な寺。

山崎の開帳：山崎の寺で仏像や秘宝が公開されること。

霊宝：尊い宝物。

開帳の札：開帳を案内する立て札。

御夢想：夢の中で、神仏が教えを示すこと。

参詣：お参りに行くこと。 御託宣：神仏のお言葉

未：ひつじ年のこと。

さあつかみどりじや：さあ、おさい錢でばるもうけじや。

地下中：村中の人たち。

(1) 文章中の——線部①の「思はれ」を現代仮名遣いに直して——線部全部をひらがなで書け。

(2) 文章中の——線部②の「知恵」の内容として最も適切なものを、次のア～エから一つ選び、その記号を書け。

ア、貧乏神の像をつくつて、秘宝として公開しようとする知恵。

イ、貧乏神を追い出して、自分たちの寺を豊かにしようとする知恵。

ウ、貧乏神が家に来ると言つて、お参りさせようとする知恵。

エ、貧乏神を利用して、山崎の寺を貧しくさせようとする知恵。

(3) 文章中の「貧乏神」が村中の人たちの前に現れて言った言葉はどこからどこまでか。その初めと終わりの三字をそれぞれ文章中からそのまま抜き出して書け。

初め		終わり	

一、次の文章を読み、後の(1)～(3)の問いに答えなさい。 【H19】

関取谷風堀之助、小角力を供につれ、日本橋本船町を通りける時、鯉をかはんとしけるに、価いと高かりければ、供の者に①いひつけて、「まけよ」といさせてA行き過ぎしを、魚売の男よびとどめて、「関取のまけるといふはいむべき事なり」といひければ、谷風立ちかへり、「かへかへ」といひてかはせたるも②をかしかりき。これは谷風のまくるにあらず。魚売の男の方をまけさする事なれば、さのみいむべき事にはあらざるを、「かへかへ」といひしは、ちとせきこみしと見えたり。これは予が若かりし時、まのあたりB見たる事なりき。 (大田南畝『仮名世説』による)

(注) 小角力：相撲取りの新弟子。

いむべき事なり：避けなければならないことである。

さのみ：それほど。

ちとせきこみし：すこしばかり早とちりをした。

予：私。ここでは作者のこと。

(1) 文章中の——線部①の「いひつけて」を現代仮名遣いに直して、——線部全部をひらがなで書け。

(2) 文章中の——線部Aの「行き過ぎし」とBの「見たる」の行為を行った者はそれぞれ誰か。次のア～エから一つずつ選び、その記号を書け。

ア、谷風 イ、小角力 ウ、魚売の男 エ、予

(3) 文章中の——線部②に「をかしかりき」とあるが、作者は、魚売りの男と谷風のやりとりのどのような点をおかしいと考えたのか。最も適切なものを、次のア～エから一つ選び、その記号を書け。

ア、谷風が早とちりをして、鯉を買うのをやめたこと。

イ、谷風が早とちりをして、高い値段で鯉を買ったこと。

ウ、魚売りの男が早とちりをして、鯉の値段を下げて売ったこと。

エ、魚売りの男が早とちりをして、別の鯉ととりかえて売ったこと。